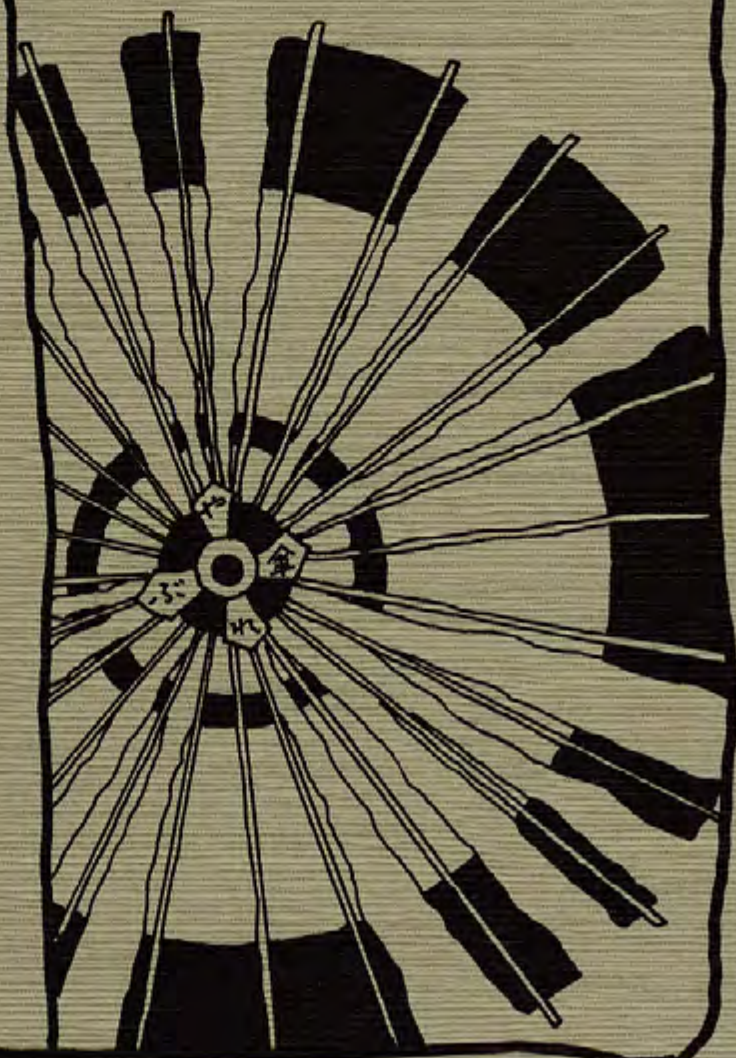


# やぶれ傘



一〇四号

二〇一八年十月

天辺に取りついてみる松手入	根橋宏次
太陽に近づいてゆく雲の峰	きくちきみえ
どぶ川のほひが少し彼岸花	大島英昭
夏の果て土偶に土の陰乳房	青谷小枝
秋没日プロパンガスのボンベ錆び	藤井美晴
女郎花見頃と聞きし寺に寄る	廣瀬雅男
おしろいがスポーツジムへ行く道に	渡邊孝彦
農家への小徑に沿つて葎の花	丑久保 勲
街路樹の影に白バイ油照り	瀬島洒望
テニス終へ芋煮会へと繰り出して	安藤久美子
奥座敷に坐り込んで大西日	有賀昌子
家居する朝に夕べに雪加ゐて	白石正躬
釣船草一枚岩の橋に風	天野美登里
レシートのならだら長き残暑かな	小山よる
吊橋の遙かとなれり山女釣り	秋山信行

抄 集 句 傘 れ ぶ や  
選 夫 紀 崎 大

ぎんぎらぎん蟬も転げるぎんぎらぎん	松村光典
新盆の夫のまはりに父母のゐて	小巻若菜
白木槿とりわけ今朝の空青く	齋藤朋子
先陣は女庭師や松手入れ	時田義勝
盛りのよき学食カレー蟬時雨	貫井照子
暑氣払ひ席に見知らぬ人のゐて	萩原久代
竹筒をするつと抜けて水羊羹	森美佐子
水筒はすぐに空つぽ原爆忌	山本久枝
盂蘭盆会古きアルバム囲みけり	湯本 実
送り火や壁に家族の影ゆるる	吉田幸恵
首に巻くタオルはづせぬ大根蒔き	石原健二
からすうりの花みて赤き火星見て	奥田温子
溽暑かな砂囊の置いてある戸口	神山市実
モノクロの映画のつづき見る夜長	倉澤節子
端居して備前蹲見てゐたり	黒澤次郎

小池一司

赤き星天にいただく暑き夜  
 台風一過青天に富士の峰  
 鳥二羽枝に並びて秋の暮  
 秋の雲近頃屋根に猫を見ず  
 芋の露静かに揺れて零れけり  
 大方は落ちこぼれぬる零余子かな  
 新蕎麦の張り紙見つつ新酒酌む

小巻若菜

竹筒よりつるりと皿へ水羊羹  
 夏の画廊のひんやりとして静か  
 乗り換への五分を日傘開きけり  
 地のほてりスカイツリーの上に星  
 新盆の夫のまはりには父母のゐて  
 送り盆火星は雲に隠れけり  
 いつの間にかうつらうつらと秋暑し

齋藤 朋子

マンションの明り川面に涼新た  
単線のホーム短し赤とんぼ  
白木槿とりわけ今朝の空青く  
一筋の飛行機雲やカンナ咲く  
昨夜の雨残る草むら虫の声  
こほろぎの声信号は点滅す  
修復のなされし仁王秋彼岸

佐々木あつ子

のうぜんのだを渡りて裏参道  
紫陽花の小振り目につく散歩道  
空梅雨の露地に「心願色みくじ」  
バツタ跳ぶ村に青空レストラン  
韓の国車窓はどこも木槿垣  
猪と蒟蒻煮込む赤ワイン  
秋の蠅湯宿の畳きしみけり

佐藤 稻子

街道の かやぶきの家の かき氷  
子の 食べぬ 茗荷は花を 咲かせをり  
秋の 雷ドカンバシんと つづげさま  
向う 岸の 風力 発電 涼 新 た  
釣り 上げて すぐさま 鯨は 天麩羅に  
母 偲び 芋茎の皮を 剥いて 干し  
芒原を 人影 往けり 昼の 月

眞田 忠雄

壇の 浦に 力漕了 へて 夜光虫  
夏 薊刈つて いささか 手を 刺され  
棟 梁と 楠の 日蔭に お茶を 飲む  
雲 間に 雷トラクタ― 駆り 逃げかへる  
河 津川の 溪声に 乗る 河鹿 笛  
ス ペインの 語講座で 語る 原爆 忌  
暮 れ方の 風吹き やまぬ 稲の花

不 忍 は 池 の 端 ま で 蓮 の 花  
ゆ か た 着 の 手 話 の 会 話 に 気 が つ き ぬ  
白 木 槿 今 朝 竹 筒 に 挿 し て み る  
青 檸 檬 ち よ つ と 接 吻 し た く な り  
迎 火 や 蕎 麦 食 べ ぬ 父 帰 り ま せ  
板 書 す る 師 の こ ゑ 籠 る 台 風 裡  
秋 め き て 犬 梳 く 櫛 の 手 暗 が り

柴崎和男

夏 の 昼 い ち ば ん 前 で ジャズ を 聴 く  
ジ ャ ズ マ ン の ア ロ ハ 着 て 吹 く 太 き う で  
新 聞 の 懸 賞 ハ ガ キ 汗 に 濡 れ  
運 動 会 の 老 人 席 は テ ン ト な か  
盆 踊 り 上 手 な 人 の 後 に つ き  
溪 谷 の 橋 を 押 し 上 げ 秋 出 水  
雨 あ が り の ぬ か る み よ け て 草 の 花

篠崎志津子

木昌子

がらがらと転がつてくる昼の雷  
朝の蟬鳴くなか旅に立ちにけり  
八月の怪談語る琵琶法師  
台風の来るの来ないのラジオ聴く  
生身魂縄文展に足運ぶ  
初さんま食ひに勝開橋渡り  
雑踏の駅の花屋に濃りんどう

高橋均

横文字のあふれ酷暑の園芸店  
パラソルに代はるかうもり開きをり  
名を知らぬ散歩の仲間秋立つ日  
門前はちりひとつなし松手入  
鰯煮る匂ひひろがりたる厨  
人数を数へ直して西瓜切る  
八月の水嵩増せる用水路

竹内文夫

炎天の鐵路ひとときは黒く延び  
日盛やしづかに逝きし人のゐて  
溪川をわたる羽虫に夏の雨  
わが亡き後迎へのありや孟蘭盆会  
濡れ縁に酒肴を並べ月の客  
伸び過ぎし野菜を刻む敗戦忌  
登校の子ら足早に八月尽

塚本虚舟

盆東風が旧友の訃を届けくる  
椅子二つ程よく置かる夜半の月  
前をゆく人は足早野辺の秋  
信濃路の夕陽目映ゆし吾亦紅  
観覧車めぐる天空雁渡る  
法師ゼミ読経のこゑ消えにけり  
凡句よし駄句もまたよし走り蕎麦



時田義勝

仰向けの蟬を起こせば鳴いて去る  
音立てて岸の草吸ふ夏の鯉  
狭き地に普請の重機夏揺する  
百日紅の花に囲まれ古き家  
墓石の鳥の糞掃く盆供養  
川岸に羽黒とんぼの列なして  
先陣は女庭師や松手入れ

中島和子

吊り革に手首さしこみ冷房車  
桐の実の落ちてきさうな寺の庭  
石組の石の不揃ひ秋湿り  
あをあをと風船葛朝まだき  
枝ひくく青松笠のゆたかなり  
商へるもの匂ひや秋祭り  
新松子川の向うの雨やんで

「山溪」と缶ビール手に列車待つ  
間に合はぬグリーンカーテン早き夏  
炎天下クルマのおしっこポタポタリ  
朝まだき紫紺の茄子に水の玉  
ポストままでゆく気も失せる猛暑かな

賛田俊之

四つ日垣にミスト機つけて夏の寺  
夕風や異の空に夏の月  
盛りのおよき学食カレー蟬時雨  
奥社へと大杉の道蟬時雨  
黒堀の寺町通り百日紅  
「おはよう」と朝顔の花かぞへる子  
風送りつやめく盆のだんご盛る

貫井照子

野口希代志

神主の自転車急ぐ夏祭  
秋茜チロルハットにひと休み  
一斉に蝸の鳴く杣の道  
真先に秋の風吹く穂高岳  
腰高にやつとやつとさ阿波踊  
踊笠目深にかぶり下駄鳴らす  
語部の重き口調や秋簾

萩原溪人

立秋やカナダを後に雲の上  
抱へられ網を伸ばす子つくつくし  
池の魚跳ねて梯子の松手入れ  
秋茄子や右手どつぷり糠の中  
青空の白雲ぽかり赤のまま  
廃屋の白粉花は今盛り  
コ―ヒーの香りほのかに居間の秋